

ラテンアメリカ都市物語

＝第12回＝

変貌する サンティアゴ

岩崎 裕子

チリの首都で、同国の最大都市であるサンティアゴ。アンデス山脈の印象が強いためか、標高が高い都市と思われることが多いが、実際の標高は520m。細長いチリの国土のちょうど中心部の盆地に位置している。1年を通して朝晩と日中の気温差が15～20度ぐらいある日が多いので、出かける際の洋服には気を付けなければならない。夏は乾燥していて、最高気温が30度前後と暖かく、冬は湿気があり、市街地で1年に数回雪が降る程度なので、気候的にはかなり過ごしやすい。ただし、冬に雨や雪が降らない日が続くと、盆地という地形故にサンティアゴはスモッグにどんよりと覆われてしまう。国際環境保護団体のグリーンピースが発表した2018年の世界の都市の空気質指数ランキングによると、サンティアゴは世界3,000都市中396位、ラテンアメリカの都市だけを見ても、なんと6位にランクインしている。しかも、ラテンアメリカ上位5位は、すべてチリの南方の都市が占めている。チリ政府はナンバープレートによる車両規制や薪ストーブ・暖炉の使用禁止などの対策を取ってはいるが、サンティアゴは毎冬必

ずスモッグに悩まされる。しかし、雨でスモッグが流れ去り太陽が出ると、サンティアゴは空気が澄んだ青空とアンデス山脈の壮大な雪山をバックにした絶景が広がる。

そんなサンティアゴに私が初めて来たのは1999年。目的はサンティアゴのカトリカ大学にてスペイン語とラテンアメリカ経済を6か月間勉強すること。その短い留学期間中にサンティアゴに魅了された私は、2002年に再訪して、現地採用にて仕事に就き、サンティアゴに住み着いてしまった。6年前にチリ人と結婚して、今は一児の母である。今回は、私の目から見た、サンティアゴの20年間の変貌ぶりについて書いてみようと思う。

公共バスシステムの大革命

留学期間中、私はチリ人のホストファミリーと一緒に住んでいたが、家の近くに地下鉄が通っていなかったため、毎日公共バスを利用していった。バスの色は黄色と白で、街中でよく目立ち、通りかかるバスに向かって手をあげればどこでも停まってくれて乗車できた。降りたいときも、運転手さんに合図すればどこでも降ろしてくれた。つまり、バス停や停車ルールはあってないようなもの。固定給料システムではなく、乗客からの運賃が運転手さんの収入に直接つながるため、1人でも多くの客を乗せようと運転手さん同士の喧嘩は日常茶飯事。制限速度などお構いなく物凄いスピードで街中を走り回っていたので、乗客の安全性にはかなり問題があった。

この黄色い公共バスのシステムが2007年に大革命を迎えた。チリ政府が公共バスシステムの安全性向



空気が澄んだ日のサンティアゴ（友人カメラマン ミランダ氏撮影）

上、近代化および効率化、大気汚染への配慮などを目的に、トランサンティアゴ (Transantiago) という新システムを構築したのだ。しかし、結果から言うと10年以上経つ現在でも市民からの評判が悪い。各車両にはGPSが搭載されていて、管制センターにて運行間隔を管理しているはずなのだが、以前の黄色いバスに比べて待ち時間が長い、運行ルートが変わり、何度もバスを乗り換えなければならないなど、利用客は不満だらけである。さらに、うまく機能していないにもかかわらず、運賃が毎年のように上がっていく。その結果とは言わないが、無賃乗車率がいまだに20%を超える。つまり、5人に1人がお金を払わずに乗車している。ICカードの導入や、乗りたいバスがバス停に到着する時間を検索できるアプリの開発など、近代化されて便利になった点もあると思うのだが、政府は市民の不満に加え、経営困難への対応も余儀なくされている。運行開始から10年以上経過したトランサンティアゴは、車両が内外ともに汚くボロボロで、現在徐々に新しい車両に交換している。一部電気バスを採用したり、車内に冷暖房やWiFiを完備したり、恰好はいいが、サンティアゴ市民の足としてきちんと公共バスの機能を果たすことを願うばかりである。



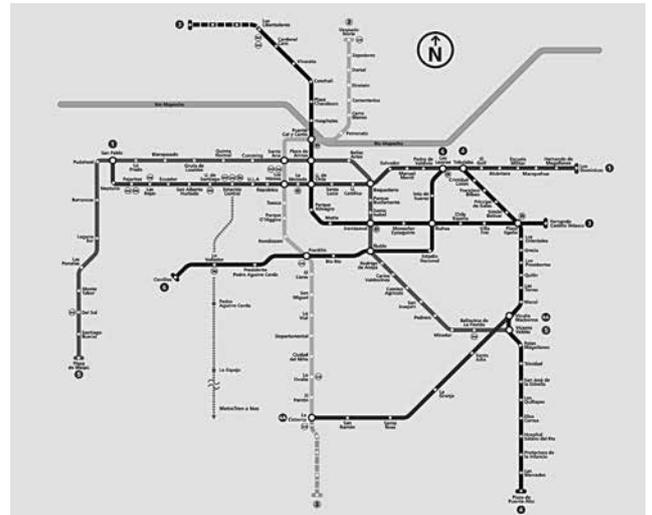
2両連結のトランサンティアゴ (以下写真はすべて筆者撮影)

地下鉄の継続的发展

サンティアゴの地下鉄運営会社であるメトロのホームページによると、2000年には3路線、52駅、全長40.4kmで毎日100万人の乗客を輸送していた地下鉄だが、2019年現在では7路線、136駅、全長140kmで毎日250万人の乗客の足となっている。ラテンアメリカの地下鉄としてはメキシコシティに次ぐ規模になる。また、2025年ごろの開通に向けて新たな3路線の計画がすでに進んでいて、完成すれば

サンティアゴはラテンアメリカで最大規模の地下鉄網を有することになる。ただし、サンティアゴの地下鉄は、ラッシュの時間帯ともなれば東京の電車並みの混雑である。市民に不評な公共バスとは違い、比較的清掃が行き届いていて、数分から10分おきぐらいの定間隔で運行している信頼性のある地下鉄は利用客が多い。日本のように降りる人が優先で、乗る人は列に並んで待つというようなルールもないので、乗降客が出入り口で力任せにぶつかり合う。ドアが閉まるように係員がはみ出している乗客を中に押し込める。最近では電車内のスリや痴漢行為などが問題になっている。テレビニュースで痴漢対策として、日本のようにラッシュアワー時に女性専用車両を設けるべきかという問いかけがあったが、被害者の女性が専用車両に閉じこもるのではなく、加害者の意識を変える対策を取るべきであるという意見が多かった。新しい路線の車両には監視カメラを設置して、痴漢行為だけでなく、スリなどの犯罪行為の防止に努めている。

図：現在のサンティアゴ地下鉄の路線図



(メトロのホームページから引用)

交通渋滞の緩和を目指して

ここ20年間のサンティアゴの道路インフラの発展には目を見張るものがある。2005年にサンティアゴ空港と市の北東部を結ぶ高速道路が開通して、空港へのアクセスや所要時間が一変した。2008年にはサンティアゴ中心部にあるサンクリストバルの丘を突き抜けるトンネルが完成。その他にも交通インフラの整備がどんどん進んだにもかかわらず、人口も新車販売台数も増え続けるサンティアゴ市内の交通渋滞は悪化。現在、サンティアゴの幹線道路や高速道

路では、交通渋滞緩和を目的として拡大・改善工事を行っているところが非常に多い。

また、マイカー通勤から自転車通勤への変更を推進するために、サンティアゴ市内のそれぞれの区が近年争うように自転車専用レーンを設置している。その全長はすでに 300 km を超えていて、サンティアゴの地下鉄網の全長の 2 倍以上である。オフィス内にシャワー完備のジムがあり、自転車で会社に到着後に、シャワーを浴びて着替えてから仕事を始めるというようなケースも珍しくない。



サンティアゴ市内の自転車専用レーン

最近、2022 年の開通を目指してサンティアゴ市内のウエチュラバ区（ここ 10 年間ぐらい、拡大発展を続けるオフィス街）とプロビデンスシア区のサンハタンとも言われる高層ビルが立ち並ぶエリアを結ぶロープウェイの建設が決まった。チリでは初めての交通手段としてのロープウェイである。現在、前述のサンクリストバルの丘を突き抜けているトンネルを通過して車で通常約 20 分かかるが、通勤時間帯には交通渋滞が非常に激しいため、1 時間かかることも稀ではない。しかも地下鉄が通っていないので、車かトランサンティアゴで通勤するしかないその区間をロープウェイで空を通過して 13 分に短縮する計画である。

さらに、約 100 km 離れている海岸エリアからサンティアゴへ車で通勤していたり、サンティアゴから車でビーチに観光に行ったりする人々のために、バルパライソとサンティアゴ間に高速電車を走らせるというプロジェクトも政府内で検討されている。車で 1 時間半かかるところが高速電車では 45 分ずつながるようになる。

建設ラッシュと不動産ブーム

サンティアゴでは、道路工事も多いが、それ以上に多いのがビルの建設。旧市街も新市街も、古い一軒家が壊され、オフィスビルや高層マンション、ショッピングモールなどが次々と建てられてきた。中心部はこれ以上建設する土地がないような飽和状態で、サンティアゴの建設ラッシュは中心部から離れたエリアにどんどん広がっている。最近では自分が住むためではなく、年金制度に不安があるチリで安心して老後生活を送れるようにという長期的な投資目的で不動産を購入するケースが多い。同じマンション内で数部屋をまとめ買いすることも珍しくない。不動産価格が恐ろしい勢いで高騰しているにもかかわらず、いまだに不動産投資ブームの沈静化の兆しは見えず需要が止まらないから驚きである。サンティアゴにはそんな勢いを象徴するようなラテンアメリカの高さを誇る建物がある。そのコスタネラ・センター (Costanera Center) の高さは 300m で、全 62 階のビルにはショッピングモールも入っている。最上部は展望デッキになっていて、サンティアゴの街を 360 度見渡せる観光スポットである。



コスタネラ・センターの展望デッキから見たサンティアゴ

外国人移民の急増

20 年前に比べて、サンティアゴの街中では、頻繁に外国人を見かけるようになった。現在は、カフェ店員やガソリンスタンドのスタッフなどはチリ人よりも外国人のほうが多いのではないかと思うぐらいである。サンティアゴ市の中央に位置するサンティアゴ区では、区民の 28% が外国人移民と推定されている。チリの国立統計機関と移民局によると、2018 年にチリに住んでいる外国人の国籍ランキングは、1 位がベネズエラ、2 位がペルー、3 位がハイチ。以前

はペルーが1位で、その他アルゼンチンやボリビアなどの近隣諸国からの移民が多かったが、近年は着実な経済成長を見せるチリによりよい雇用機会を求めて、かなり遠く離れた国からも移住してきている。

今年2月、仕事復帰に向けて娘の保育園探しをしているときに、うちの近所にあるチリ版認可外保育園を見学に行った。0歳児クラスには6人の赤ちゃんがいて、そのうち1人は中国人、2人はハイチ人、残りの3人がチリ人。実に50%が外国人だった。また、保育料が無料のチリ版認可保育園を訪れてみると、入り口にスペイン語とハイチ語の2か国語で表記されている張り紙があった。ハイチ語の表記があるということから、いかにハイチ人からの問い合わせや出願が多いのか想像できる。

エコな取り組み

2019年2月3日、チリのスーパーやデパート、大型チェーン薬局などからプラスチックのレジ袋やビニール袋が消えた。自然分解までに数百年かかると言われているビニール袋の使用を制限して環境保護に貢献するために、チリ政府が法令により大型店舗でのレジ袋を全面的に禁止したのである。これはラテンアメリカでは初めての試みである。車でスーパーに行き、大きなショッピングカートがいっぱいになるぐらいの商品を買いだめするのが一般的なチリでは、これは一大事。1回の買い物で10枚以上のレジ袋を使うのが当たり前だった市民は、スーパーにマイバックや段ボール箱などを持参しなくてはならなくなった。レジのところには布製のエコバックや大きな紙袋を有料で置いている店もあるが、ビニール袋はもう存在しない。私は5か月の赤ちゃんがいて、スーパーに買い出しに行くのが困難なので、最近はおっぱらネットスーパーを利用している。宅配されてくる食料品や日用品もすべてビニール袋ではなく、紙袋に入っている。2020年8月には中小規模の商店からもレジ袋は撤廃される。もしチリを訪れる機会があれば、エコバックを忘れずに持ってくることをお勧めする。

20年間で豹変したサンティアゴ。今後も変貌し続けるサンティアゴ。ラテンアメリカの中で優等生的な存在のサンティアゴがこれからどのように発展していくのか楽しみである。

(いわさき ゆうこ Allfresh Exportaciones Ltda. オペレーション
マネージャー。在チリ)

